



1万人を超える犯罪者の心理分析から見た子育ての大切さ(3)

東京未来大学 副学長 こども心理学部長 / 出口 保行

前回までの2回の連載でお伝えしたとおり、筆者は、大学教員となる前に法務省の心理職として、少年鑑別所・刑務所・拘置所において1万人を超える犯罪者の心理分析を行いました。そうする中で、どの事例にも大きく影響を与えていたのが家族の存在でした。とりわけ、保護者の子育ての方法（以下、養育態度という）が、非行・犯罪の発生に大きく関わっていることがわかりました。

短期連載①では、保護者が「よかれと思って」している声かけが、かえって子どもに悪影響を与えてしまう場合があることを紹介しました。親ならば誰でも使う「みんなと仲良くしなさい」という声かけが、度を越していた場合、自己主張できない性格を形成し、最後には誘われるままに万引きの常習犯となってしまう例を取り上げました。こうした際、私たちには「確証バイアス」という自分に都合の良い情報しか取り入れない傾向があるので、常に自らの養育態度に対して自己点検をしつつ、適宜軌道修正することが大切であることをお伝えしました。

短期連載②では、内閣府でも取り上げられている筆者の「攻める防犯」という防犯理論について紹介しました。

その中で、犯罪や非行を防ぐためにとても大きな影響力を持っているのが「家族というコスト」であることをお話ししました。「コスト」とは失うものの大きさです。動機を形成しても家族のために思いとどまることができれば、これ以上のことはありません。そんな中で「勉強しなさい」と保護者が言い続けたことが、保護者に対する憎しみに変わり、殺人未遂事件にまで発展した例を取り上げました。養育態度の著しい偏りは、時として優秀な子どもを犯罪者に仕立てあげてしまうことがある一例でした。

最終回である今回の連載は、こうした養育態度自体に焦点を当てます。筆者は、アメリカの心理学者サイモンズの研究を参考に、養育態度をタイプ分けし、それぞれの持つ問題点について研究を進めました。

そもそも、養育態度の方向性は、図1で示すように「支配⇄服従」という子どもに対する接し方の方向性と、「拒否⇄保護」という子どもを受け入れるかどうかという方向性に整理されると考えられています。

筆者が上梓した「犯罪心理学者は見た危ない子育て」(SB新書、2023、以後拙著という)では、各方向性の持つ意味について以下の通り説明がなされています(なお図1、図2の出典もこの書籍です)。

- 支配：子どもに命令したり、強制したりする養育態度
- 服従：親が子どもの顔色をうかがうように接し、子どもの言いなりになる養育態度
- 保護：子どもを必要以上に保護しようとする養育態度
- 拒否：子どもを無視したり、拒否したりする冷淡な教育態度

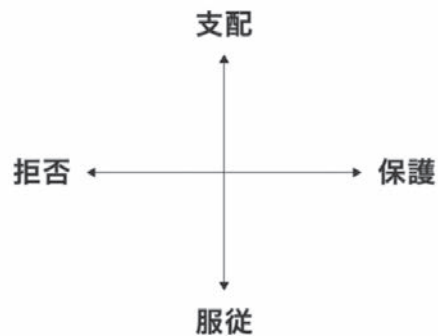


図1 養育態度の方向性

さて、図1を見ると、4象限に分かれることがわかります。それぞれの象限は図2で示すとおり養育態度の「型」を示しています。

では、一つ一つの「型」の特徴を見ていきましょう。

「支配×保護」=過保護型

子どもを支配し保護する、過剰に積極的な養育態度。世話を焼きすぎて子ども自身の成長の機会を奪ってしまう。

「支配×拒否」=高圧型

子どもを受け入れず、支配的に振舞う養育態度。命令して親の思うとおりに行動させようとする。

「服従×保護」=甘やかし型

子どもの顔色をうかがい、いいなりになる養育態度。必要な指導を行わず、子どもに課題解決の機会を与えない。

「服従×拒否」=無関心型

子どもに対して拒否的であり、主体的に関わらない養育態度。親自身の生活が中心となり、子どもへの関心が薄い。



図2 養育態度の型

この4つの型のように、2種の方向性の養育態度が重なったものがほとんどです。どの親も程度は色々ですが、この4つの型のいずれかに属していると言っても言いすぎではありません。メディア出演時などよく「どの型が非行や犯罪につながりやすいですか」と聞かれますが、答えは全てです。どれも行き過ぎればそれが非行や犯罪につながります。

一例として今回の連載では、拙著の中でも紹介している「過保護型の養育態度が薬物犯罪につながったケース」を紹介します。

ヒロカズは両親の15年もの長期に及ぶ不妊治療の末に誕生した待望の子どもでした。両親にとってヒロカズが生活の全てであり、子ども中心の生活を送っていました。子どものことを心配するあまり、ブランコやジャングルジムも家の中に設置し、外遊びをさせないようにし、テーマパークに興味を持つと、年間パスポートを買うばかりか、しまいにはテーマパークのそばに転居までして毎日のように連れて行きました。受験で苦勞をしないようにと、幼稚園から大学までエスカレーター式で進学できるところに入学させもしました。両親はとにかく何でも手伝ってあげるというスタンス。子どもが主体的に判断して行動することを許さないし認めません。こんな生活を送るなかでヒロカズは「やってもらえることが当たり前」になり、面倒くさいことは全て親任せになりました。大学を卒業し親のコネで就職はしたものの、自分から何かに関わろうとしないヒロカズは、社会の荒波の中で生きていけるはずありません。しまいには引きこもりに近い生活に陥り、そんなときに出会ったのが「覚せい剤」でした。「強烈な快感」が得られるし「時間も忘れられる」。ヒロカズにとっては魔法の薬でした。ほど

なく常習化して奇行が多くなり、逮捕されて刑務所で受刑することになりました。

子どもをかわいく思い保護すること、親ならば誰でもすることです。ただ、行き過ぎはいけません。全てにおいて子どもが失敗しないように先回りして安全を確保したり、障害を取り除いてしまっただけでは、子どもは様々な経験ができなくなります。本来の発達過程で身につく「問題解決能力」が育ちません。また、当然ながら依存的になり、自立心も育たないわけですから、自分で物事を判断することができなくなります。

子が親に依存的になるばかりではなく、親が子どもから援助を求められることに価値を見出す場合「共依存」に陥ります。子どもを依存させることで自分を満たすようになります。こうなるとこうした行き過ぎた養育態度から抜け出すことは一層難しくなります。

ヒロカズが収容されている刑務所に両親は足しげく面会にやってきました。そこでも両親は「いじめられていないか」「お腹はすいていないか」とヒロカズを案じ、しまいにはヒロカズを実刑にした裁判官の批判までしていました。刑務所まで来てこのありさまで。ヒロカズの出所後が心配になりました。まさにこの両親は「ヘリコプター・ペアレント」の典型。常に子どもの上空でホバリング（上空で停止していること）して、必要だと思えば急降下して子どもを助けてしまいます。

もちろんこれは極端な例ですが、どの養育態度も行き過ぎれば子どもの成長を阻害し、それが非行や犯罪につながることになります。

今回の連載を通して子育ての大切さについてお話をさせていただきました。拙稿や拙著が少しでも皆様のお役に立てれば幸いです。

私達は**衝撃緩和帽**の開発を通じて大切な子供達の未来を守ってゆきます！

ゴツン!! から、まもってあげたい。

遊具でふいに 地震でクラリ

子どもの頭を守る帽子

企画・開発 **株式会社リード**
〒028-6104
岩手県二戸市米沢字家ノ1-39-1
<http://hot-anshin.com//index.php>

お問い合わせはこちら
アルファアテンド株式会社
TEL 070-5550-1982
FAX 042-673-2076
alpha.attend@gmail.com

この帽子痛くない!



超スマート社会=Society 5.0を目前に

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 **安家 周一**



国が発表したこれまでとこれからの時代のポンチ絵を見てみると、Society1.0の狩猟採集社会から始まりこれからは同5.0超スマート社会、AIの社会に進むとされています。Society1.0は狩猟採集社会で、続いて農耕社会、そして産業革命を経てデジタルの時代が現在進行中で、次にはSociety5.0の時代が到来すると推論されています。この進みかたを見てみると、一つ一つの時代は同じような期間で進んでいるように見えるのですがそうなのでしょうか。

私たちホモサピエンスが誕生しアフリカ大陸を出て地球上に広がってから7万年ほどとされています。そこから食料を求めてあちこちに旅をし、その地に適応し定住して農耕・牧畜に移ったのは、1～2万年ほど前で、Society2.0～4.0の時代は、人類史上の20万年の内、ほんの10%弱に過ぎないと人類学者は言います。あとの19万年、全体の90%以上は狩猟採集の生活でした。2足歩行でしたが足も遅く体毛も少ないか弱き人間は、助け合いながら集まって生活し、周辺に食べるものがなくなれば他の地に移動しました。また村人と諍い(いさかい)が起これば村から出ていくという、非常に緩やかな集団であったようです。すべて食べるものは自らで探し採(と)り、獲(と)っていました。

海や川に近ければ貝や魚、グロテスクなタコやイカ、カニやエビを獲り、山があれば山菜を採り、たまには獣が穴に落ちて食べることもあったでしょう。黒曜石を使って刃物も作っていたようです。野草や根、木の実や果物を探して、自分たちの食べられる分だけいただくのです。冷蔵庫や倉庫はありませんから、皆平等に分け合い、必要以上に採ったりはしない。まさしく持続可能SDGsな生き方です。このような生活を原始的な社会と定義するのはあまりにも傲慢だと感じますし、かえって現在の文明は生き物として考えると退行している、とも言えるのではないのでしょうか。

私の園にはボーイスカウトの団本部があり、私も隊長などをさせてもらいました。好んで隊長を引き受けたというよりも、たまたま園に団があって、せざるを得なかったというのが本音です。敬礼をしあう風土に違和感がありました。

しかし野外活動やロープワークなど大変勉強になりました。ボーイスカウトの様々な活動が最終的に目指すスカウト像は、「一人で原野にいてもナイフ1本で生きること」と聞きました。イギリスで発祥した活動ですが、ま

さに狩猟採集の生活がイメージされています。人として完成した状態がこの状態であるとすれば、現代人は全く未熟で歯が立ちません。

私が小学生の昭和30年代、こうもり傘は高価で家では買ってもらうことはできません。通学のときにもビニールのカッパを頭にかぶり、走って登校します。登校の時間は晴れていても、帰りの天気予報なんて教えてもらえませんから、雨が降り出しカッパの用意がなければずぶぬれになってしまうのが当たり前。初めて傘を買ってもらったときはうれしくて、小躍りしたのを覚えています。名前を書いてもらって大事に使いました。

現在では急な雨となればコンビニに駆け込み、安価なビニール傘を買って雨をしのぎます。雨が上がれば何本ものビニール傘が駅や道端に捨てられている、この光景を豊かとは言わないでしょう。少し高価でも、しっかりとした傘を30年以上大切に使うことと比べてどうでしょう。良品を大事に使うことと、安物を使い捨てること、どちらが質素で合理的、環境にやさしいのでしょうか。このような価値について、家庭内で子どもたちと考える機会はとても大切だと思うのです。

電車でたまたま空いている席があり、座りました。前や横にいる人のほぼ全員が下を向いてスマホに夢中です。このスマホ依存をスマート社会というのでしょうか？

Society1.0の狩猟採集社会と比較してみるとわかりますが、集団の皆はそれぞれ違うけれども、皆が生かされ幸せに共に生きることが考えられる集団のほうが進化しているのです。古代の遺跡から肢体が不自由な人のもと思しき骨が出土しているそうです。多様な年齢、人がそれなりに集団の一員として生かされていた永いSociety1.0社会があったのです。その結果として80億人もの人が地球上にここまで広がっているのでしょう。

Society5.0の時代に一番大切な素養は、狩猟採集時代・縄文時代に大切にされた、生きていく力や必要なものを自分の手で作り出す賢い手、感性、愛他心など、共に生きる力なのだと思います。大人のそばで見守られながら思いっきり手や足、頭を使って仲間とくずすほぐれつ遊ぶ経験が、幼少期の一番大切な環境なのだと思います。このことを、子育て世代の人たちと共有する事が、私たち園長の最大の仕事です。

参考文献

ヒトの原点を考える 長谷川眞理子著 東京大学出版会 2023
縄文からまなぶ33の知恵 はせくらみゆき著 徳間書店 2024

幼児教育の質向上とECEQ[®]～期待される役割と効果～①

今号より4回にわたって、ECEQ[®]に参加された学識者や行政の方から、ECEQ[®]に参加した感想やECEQ[®]に期待される役割・効果を執筆いただきます。幼児教育の質向上が求められる現在、その実現のために改めて園やECEQ[®]に求められることを見つめ直すきっかけとなれば幸いです。

ECEQ[®]に学ぶ



富山県教育委員会教育みらい室小中学校課

富山県幼児教育センター 指導主事／小林 雅恵

富山県幼児教育センター（以下、本センター）では、令和元年度から幼児教育施設訪問研修（訪問研修）を実施しており、県内に約60名いる幼児教育スーパーバイザー、幼児教育アドバイザー、幼児教育推進リーダーが、2、3名のチームとなって訪問、参観し、園・所の保育者と一緒に協議を行います。令和5年度からは、乳児も含め、幼児教育施設の全てのクラスを対象として研修を行っています。令和6年度は約50施設から要望を受け、希望する園・所には年2回訪問し、これまで以上に園・所に寄り添った研修内容となるよう試みています。

近年、幼児を取り巻く環境は大きく変化し、幼児教育も変革を求められています。そのため、本センターでも訪問研修の在り方を見直し、現場の保育者のニーズに沿った、よりよい研修となるよう努め、ECEQ[®]等、各幼児教育団体が主催する公開保育等にも時間の許す限り参加し、学びの機会としています。

私は、小学校の教員として長く「授業公開を基にした研修会」で授業を公開、参観し、授業づくりや支援の在り方を研修してきました。先日、ECEQ[®]公開保育に参加し、丸一日の公開保育を振り返ったとき、「私がこれまで経験してきた研修とは何かが違う。ECEQ[®]は、参加した保育者にとっては、単なる研修会ではないのかも」という印象が残りました。このように感じたのは、「各グループの振り返り」の時でした。公開保育をした保育者が、グループ協議を終えた感想を述べた後、担当のコーディネーターが、公開保育をした保育者との出会いの場面やその後の話合いの様子、その中に見えた保育者の悩みや葛藤、がんばり等、実感を込めて語っておられました。心から応援し、支え、保育者と一緒に当日を迎え、ずっと、保育者の味方として過ごされたことが、私にも伝わってきました。「自分のことを理解しようとしてくれる人がいて、その人が全体の場で、自分のことを、よさも弱さも含めて受け止めてくれている」。公開保育をした保育者をうらやましく思う、その気持ちが、私の抱いた印象だったのだと気付きました。

ECEQ[®]は、少なくとも、私が小学校の教員として繰り返し受けしてきた「研修」とは異なります。ECEQ[®]に

ついての解説を読むと「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム（ECEQ[®]）」と記載されています。そもそも研修という位置付けではないのかもしれませんが、それ以上に

- ・公開園が自分たちの課題を明確にできるよう、事前の対話を大切にする。
- ・公開保育をする保育者自身が自分の課題に気付けるよう寄り添い続ける。
- ・保育者の課題を「問い」という形にして参観者に提示し、一緒に考えることができるようにする。

など、幼児教育の質向上に向けて、システムがしっかりと構築されていると感じます。これは、幼児教育が環境を通して行うものであるように、ECEQ[®]の中でも環境づくりに力が注がれているということだと思います。保育者が身近な環境、つまり日頃の保育に主体的に関わることができるよう、コーディネーターが保育者と共に話合いを重ねながら環境を創造していく。ここに幼児教育の考えの神髄があると感じます。私は、「ECEQ[®]で公開保育を行うことで、保育者は幼児教育の考え方を身をもって体験することができる」と考えます。今回、各グループの振り返りで、公開保育をした保育者が「子どもの素敵などころを捉えて、すぐにほめる、認めることを大切にしたい。なぜなら、私も今日、公開保育をしてすぐに自分のことを認めてもらって、とっても嬉しかったからです」と発言した場面がありました。保育者自身も環境です。子どもが笑顔になる環境がまた一つ増えた嬉しくなった瞬間でした。

令和6年度、本センターの訪問研修では、「訪問園で公開保育をする保育者に事前・事後アンケートを実施する」という新しい取組を始めました。令和5年度までは、主に訪問園の園・所長にアンケートを行っていましたが、より現場の保育者のニーズに沿った研修にしたいという思いから始めた取組です。この取組は、令和5年度に参加したECEQ[®]をヒントに生まれました。ECEQ[®]に学ぶところは大きいに学び、「幼児教育の質の向上」のために、共に学び合う仲間でありたいと思います。

子どもの成長を願い学び続ける方々のために

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 副理事長／安達 譲

コロナ禍により、数年間開催を延期していた、あるいはオンライン上で行われていた研修会等が徐々に以前のような対面での開催形態に戻ってきました。数年ぶりに参加して様々な方々と顔を合わせながらその日の研修に共に参加したり、感想を語り合ったりできることを本当にうれしく思います。参加された方々とのやりとりやワークへの参加など、やはり対面での研修ならではの良さを感じます。しかし、その一方でこの研修会に自分が参加しているこの時間にも園では保育を実施しているという現実もあります。両親が共働きである家庭が増加し、ひと昔前のように園を完全に休んでみんなで一斉に研修会に参加することも一部の園を除き難しくなっているのではないのでしょうか。

また、就学前の教育・保育施設には、教諭・保育教諭・保育士に加えて様々な専門性をもった多様な職種の方々が働いておられるようになってきました。学ぶべき内容もキャリアや仕事の内容に応じて非常に多岐にわたるようになり、特別な支援を要する子どもの増加に伴い、加配担当など園で働く非常勤の方々も増加しています。

「保育におけるCo-Agencyを考える」というテーマで今年5月の保育学会は開催されました。私たちはこどもをまんやかに、それぞれが主体性を発揮しつつ、互いに支え合いながら、これからの社会を生きる子どもたちが自分らしく主体的に人生を歩めるようにその育ちを支える役割が求められています。そして質の高い幼児教育・保育を提供することは私たちの責務ではありますが、同時に私たちはもっと子どもの笑顔を観たい、困っている子どもに寄り添いたいという願いから、主体的に学ぶ存在でもあります。

機構では18年前に幼児教育にかかわる全ての教職員が研修の主体者として学ぶべき内容を俯瞰して、自ら学び続けるという理念の元に「保育者としての資質向上研修俯瞰図」を作成しました。しかし、実際には様々な研修に出かけることはなかなか難しい状況でしたが、コロナ禍を経て、令和6年度より、文部科学省委託研究事業の受託により開発した「幼稚園ナビ」のノウハウを活かし開発した幼児教育研修システム「ゆたかなまナビ」が本格的に動き始め、時間や場所、働き方など様々な制約を超えて、教職員が主体的に継続的に学ぶことができる研修提供体制が実現しようとしています。

全国団体である強みを活かして、全国各地域、各都道府県で実施された魅力的な研修を全国の皆さんにお届けするとともに、まだまだ未完成なシステムをより使いやすいシステムとして育てていくために各地からのご意見を集約しながら利便性の向上に努めてまいります。そして、皆さんが学んだ研修の履歴を確実に保管していきたいと存じます。

今後も子どもの成長を願い学び続ける方々のために「学びのプラットフォーム」としてゆたかなまナビの研修コンテンツの充実にも努めてまいりますので、どうぞご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

計61コンテンツの研修をオンデマンド配信しています!

様々なキャリアや専門性をもった、教職員の方々为主体的に学べるよう研修俯瞰図番号に偏りなくコンテンツを揃えています。

12月に新たなコンテンツの配信を予定しています。



株式会社 ニシハタシステム

園業務のお悩みを
IP無線機
で解決します!



タレント・俳優
杉浦太陽



令和6年度「ゆたかなまナビ」オンデマンド研修のご紹介

当機構では場所や時間を問わず保育者の主体的な学びを支援するためオンデマンド研修を配信しています。現在配信している計61コンテンツの中から講師の先生方にその内容をご紹介します。

幼稚園における満3歳未満児の

受入れの広がりに向けて

京都教育大学教育学部 教授／古賀 松香

令和元(2019)年10月に開始された幼児教育・保育の無償化以降、満3歳児クラスにつながる2歳児の受入れクラスに保護者の注目が集まるようになりました。文部科学省の令和5年度幼児教育実態調査によると、私立幼稚園の33.4%で満3歳未満の非在園児を定期的に預かっていることや、実施日数としては週5日が全体の56.4%と最も多くなっていること等が明らかにされています。今後のこども誰でも通園制度の本格実施に向け、ますます未就園児の預かり型の保育の開設が進んでいく流れにあります。

京都ではより早期から2歳児の受入れクラスの広がりが見られており、平成29(2017)年から昨年度まで、コロナ禍を超えてほぼ毎年、年間3～4回の2歳児の保育を学ぶ研修シリーズを担当させていただいてきました。

各園では地域の子育てニーズに応じてさまざまなかたちで2歳児の親子を受け入れている実態があります。このことは、保護者にとっては、欲しい子育て支援を自ら選択することが可能な、柔軟な在り方につながっており、また、子どもにとっては家庭生活から幼児教育の場での生活への移行を緩やかに経験することも可能な在り方につながっています。そこに幼稚園が行う子育ての支援の独自性があり、各園の理念のもとで工夫されてきたよさがあります。そのことを大切にしながら、子どもの育ちにふさわしい保育内容をどう各園で実現するか、ということ、研修では考えてきました。

今回、令和5(2023)年度に私が京都府私立幼稚園連盟の研修シリーズ第1回目でお話した内容を、オンデマンド研修コンテンツとして取り上げていただけることになりました。まず、冒頭には、幼稚園における2歳児の保育に対する社会的ニーズや制度上の特徴等を説明し、実践の工夫は園によってさまざまにありうることをお話しています。また、このときの研修は、参加予定者の方に事前アンケートでお答えいただいた学びたい内容に基づいて作ったので、発達と保育に関する多岐にわたる内容も含まれています。まさに、2歳児保育について知りたいことを集めました、というアラカルトメニューになっているので、これから2歳児クラスを始めるにあたって何をどう大事に考えたらよいか、迷っている園の先生や、やり始めたけれど2歳児の姿をどう捉えたらよいか悩んでいるという先生方には、なんらかのヒント

になるかもしれません。やはり2歳児の発達の姿を理解することが保育の基本ですので、アタッチメントや依存と自立、自己の育ち、運動や生活習慣、感情とその制御の発達、言葉やものの認識の育ちと遊び、といったことをお話しています。

おそらく現場での保育に当たっておられる先生方は、日に日に感じておられる子どもの育ちの気になる姿がおりかと思えます。親子が視線を交わして、呼吸を合わせて会話することが減り、泣いたらスマホが渡されて動画やゲームがあやしてくれる生活を送ってきた子どもたちが、幼稚園という場で、人やモノ、さまざまな出来事に会い、驚き、気持ち惹かれ、手を伸ばし、体験を広げていく生活を充実させていく。その保育プロセスが、これからの子どもたちの育ちにとって、非常に重要なものとなるに違いありません。研究においては、親子のアタッチメントのみならず、保育者とのアタッチメントの形成が小学校以降の教師との関係形成に影響を及ぼしうる重要なものであること等がわかってきています。保育者との安定したアタッチメントをしっかりと形成することが、まずは、園生活の入り口としての2歳児の保育の課題です。その保育者との安定した関係を基盤として、いろいろな子どもと出会い多様な感情体験をし、感情がぶつかり合いながら調整せざるを得なくなるような具体的に直接的な体験を豊かにすることが望めます。満3歳未満児の幼稚園における受入れが広がる中で、本研修コンテンツが先生方の実践を支える一助となりましたら幸いです。

古賀松香氏の研修コンテンツを受講されたい方は こちら

- 申込期間：～令和7年2月27日(木) 17時
- 配信期間：～令和7年2月28日(金) 17時
- 教職員登録のうえ、
右のQRコードか
ゆたかなまナビより
お申込みください。



委員長・チーム長就任にあたっての抱負

● 高尾恵子広報委員長より

超少子化の影響を各場面で感じています。広報委員長を拝命し、今後の方向性を考えたとき、まず浮かんだのが、賛助会員数の減少でした。「こどもがまんなかしんぶん」の紙発行とデジタル発行を併用した要因もあるかもしれませんが、明らかに少子化による園児減は否めません。子どもの数が少なくなっている今だからこそ、子育ての楽しさを広く訴えるための新聞づくりを強化しなければいけないと強く感じました。「こどもがまんなかしんぶん」は私たちの声を直接家庭に届ける唯一の手段です。幼児教育の大切さを家庭に伝える重要な役割も担っています。一人でも多くの保護者に届けることを使命と考え、内容を深めていきます。

また、昨年度まで「しんぶん」「まなびの広場」「ホームページ」の各小委員会で活動していましたが、今年度より委員全員で全部の部門に関わります。知恵を出し合いながら効率化を図り、それぞれの媒体を通じて、充実した情報提供を行っていきたくと思っています。

● 岡本潤子教育研究委員長・研修チーム長より

幼児教育が「質評価の時代」に向かっている今、当機構は確かな研究と研修を全国へお届けすることが役割であり使命であることを自覚し、研究研修の「今と未来」を全国へお届けすることができるよう、微力ながら熱心に務めてまいりたいと思います。事業計画として、暑い夏に熱い意見交換が期待できる第15回幼児教育実践学会の開催、全国どこでもよい学びの機会を得ることができるようオンデマンド研修の充実、各園にて研究研修をリードする園長・ミドルリーダーの育成にかかるカリキュラムの検討、公開保育を活用した幼児教育の質向上システムであるECEQ[®]の研究開発を継続実施すること等を掲げ、全国の皆様と協力・連携しながら進めてまいりたいと思っています。

私たちが目指す幼児教育の質向上が子どもたちの幸せに通じるよう、その実践者である保育者お一人お一人の日々の取組を研究研修を通して未来へつなげたい、それが委員会の役割であり使命であると思っています。

● 藪淳一ECEQ[®]・評価チーム長より

「公開保育を活用して幼児教育の質の向上を図ろう」という取り組みが機構でスタートしたのは、平成25年度のことです。当時は、まだECEQ[®]という名前さえも付いていませんでしたが、この11年間でECEQ[®]実施園は300園を、ECEQ[®]コーディネーターの数は400人を超えるようになりました。これは、ECEQ[®]の開発・普及に携わってこられた機構の多くの先生方のご尽力とともに、「やってよかった」という実施園の実感がじわじわと広がりを見せている証だと思えます。

加盟園が定期的にECEQ[®]を行えるための土台作り、コーディネーターの継続的なフォローアップ、学校評価としてのECEQ[®]など、課題は次の局面に向かっていますが、ECEQ[®]という仕組みがさらに豊かに「育て」いくことが、子どもたちのよりよい「育ち」につながると信じて、各地区を代表する心強いチームメンバーと一緒に取り組んでまいります。全国47都道府県の先生方のご理解、ご協力、よろしくお願いたします。

● 川原恒太郎オンデマンドチーム長より

「ゆたかなまナビ」オンデマンド研修は全国どこからでも場所や時間を問わず学ぶことができ、自分のキャリアステージや課題に応じて研修のを選び、主体的・計画的に学ぶことができるといったメリットがあります。子どもにかかわる全ての教職員は、各自の資質能力を向上させることが求められており、都道府県団体が実施する対面形式の研修が増えていくとしても、オンデマンド研修の果たす役割はますます大きくなっていくと考えられます。オンデマンド研修の重要性を鑑み、「保育者としての資質向上研修俯瞰図」に沿った対面・オンライン・オンデマンド研修で収録した良質なコンテンツの募集や、幼児教育にかかわる今日的課題、保育者の資質向上に資する良質なコンテンツ、学ばなければいけないと考えるコンテンツを作成・収集します。オンデマンドチームでは、園にかかわるすべての教職員がオンデマンド研修の良質なコンテンツで学びを深められる「学びのプラットフォーム」を目指したいと考えています。

● 野波雅紀システムチーム長より

本年3月1日に「ゆたかなまナビ」がスタートしました。移行に際しましては皆様に多大なご理解とご協力を賜りましたことをあらためて御礼申し上げます。2024年度からはシステムの維持・管理・改善を担う「システムチーム」が新たに組織されました。教職員、設置者・施設管理者、都道府県団体事務局の皆様それぞれに必要な情報管理機能を整備するとともに、皆様のご意見を賜りながら改善を図ってまいります。一方で教職員の主体的な学びをサポートする機能や、園内研修に資する環境の提供、オプション拡充により主催者の求める多様な形態への対応などの課題にも少しずつではありますが取り組みたいと考えています。

幼稚園ナビが本格稼働した2017年以来、先達の先生方が都道府県共通のシステム開発ならびに研修の体系化と履歴の電子データ化に取り組んでこられた積み重ねを大切に継承させていただき、「ゆたかなまナビ」システムの拡充に寄与できればと思います。